

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4390101758		
法人名	株式会社 桜会		
事業所名	認知症高齢者グループホーム アクア		
所在地	熊本市南区八分字町22-1		
自己評価作成日	平成30年3月10日	評価結果市町村受理日	2019年5月13日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなろ福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205
訪問調査日	2019/3/30

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

認知症になっても不安や混乱を感じない穏やかな生活の支援、そしてできるだけ自分の足で歩いていただくための支援を第一に考えています。運動機能の低下は日常生活維持および活力に大きな影響を与えます。個々の状態に応じた個別機能訓練を毎日行い、転倒のリスクの高い方にも安易に車いす使用を勧めるようなことはしない介護を実践しています。入院中に車いすを使用していた方が退院後、施設でのリハビリにより以前のように杖での歩行になりました。中庭にはアンツーカーを使用した100mほどの散歩道があり、またやや広めの芝生と家庭菜園のような畑があります。気候の良いときは職員と一緒に日向ぼっこや散歩をする方、一人で自分のペースで散歩される方がいらっしゃいます。外出行事も画一的なものではなく、一人一人の状態に応じた行事構成にしています。毎日の体操やレ

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

手入れの行き届いた敷地内は日光浴や散歩、近隣保育園児との交流など入居者の外出を後押しする場所となっている。また、外出が困難になった方へも、庭先の草花を飾ったり、季節の壁面や入居者に馴染みの花の写真を掲示するなど職員の工夫や特技を活かし、外出気分を味わってもらっている。高齢化にある中、「人生の終わり、命はだれの目にも見えず、予感も確かではなく、だからこそ残された時間が充実したものになるよう、寂しい思いをされないよう、寄り添いの介護に努めていきたい」とし、看取り介護や本人にとって幸せな最期など6項目を文章にした冊子により、家族にも不安な思いを共有しながらその方らしい最終を支援している。冊子の中の一つひとつの絵にも、心安らぐホームの配慮が窺える。開設から地域との連携や入居者の穏やかな日常生活に努めながら、現状に満足することなく、食事支援や安全管理をはじめ、さらなる充実に意欲をもって進んでおり、今後の活躍にも大いに期待したいホームである。

Ⅴ. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
I.理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	残存能力や歩行能力を一日も長く維持していただけるよう、リスクをとっていく介護、過剰とならない介護を実践している。必要であれば個別トレーニングも行い能力の維持復帰するよう実践している。職員も申送時に理念の唱和を行い意義を再認識している。	開設から3年を迎え、ホームの取組みが地域へ徐々に拡散する中、当初からの理念に向き合いながら本年度は、玄関への掲示だけでなく、職員一人ひとりへ確かな意識付けとして申し送りの中で唱和するようにしている。入居者の失った能力の再開に向け、歩行が再び出来る様になった方、ペーストから普通食へ移行が出来た方など、日々の生活の中から入居者の残存能力を見極め、喜びに繋がる支援を目指している。	毎朝の申し送りで理念を唱和し、1項目づつかみ砕いて話すことで理念の浸透を図っている。今後は定期的な振り返りの機会を期待したい。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	・校区主催のスポーツイベントの応援 ・地域のコンサートの観覧、出演 ・「姿勢の良くなる体操教室」の開催 ・近隣の幼稚園との屋内外の交流 ・施設外においても一員として、振舞にも気を配る	地域行事「ながなすコンサート」には、小規模事業所と合同で出かけ、人々と交流する機会を持っている。沿道から熊本城マラソンの応援に参加し、恒例となっている地元保育園児との交流は季節ごとに行われ、秋は芋掘りを楽しんでいる。交流室を提供し「姿勢のよくなる体操教室」を開催して、地域の人々を受け入れながら、日々の散歩やスーパーでの買い物を通じ、入居者が地域へ出る機会を支えている。	昨年度の地域からの車の運転マナーへの意見に早急に対応するとともに、ホームの一員として職員一人ひとりが十分心を配って振舞うよう申し合わせるなど、改善が図られており、継続した取組を期待したい。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	週3回行っている「姿勢の良くなる体操教室」や姿勢セラピストによる「姿勢セミナー」の開催し健康維持に対する啓蒙活動を行っている。			

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2カ月に一度会議を行い、活動報告を写真を交えながら報告している。参加者は民生委員、自治会長等地域の方や地域包括の方、歯科医など10名ほど参加して頂いている。食事体験や防災訓練の様子の評価をいただいている。	交流室を会場として社協や包括、地域代表者が参加している。本年度は先に、入居者の生活圏であるリビングや居室を見てもらい会議場に入ってもらよう工夫しており、参加者が位置関係や入居者の様子を直接確認することで、会議内容がより詳細に伝わっている。会議を利用し、身体拘束への取り組みを開示して、ホームの姿勢を示すとともに、拘束ゼロへの考え方を発信している。この3月には会議の中で避難訓練を実施し、参加者の評価を受けている。	地域とをつなぐせっかくの機会を家族にも直接見て参加してもらおうよう、今後も声かけの必要性があると思う。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	監督官庁である市とは、綿密に連絡を取り合いご指導やご助言をいただいている。	運営推進会議には社協や包括が参加しており、ホームのありのままを見てもらいながら、情報の共有に努めている。管理者は普段から行政に足を運び、書類の書き方を尋ねたり、介護認定に立ち合い入居者の現状を正確に伝えている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	グループホームの目的や役割を伝え、施錠や拘束をしない方針を理解していただいている。尋ねられた際には丁寧に説明している。	運営推進会議を活用し、身体拘束排除に向けたホームの姿勢を示し、外出傾向の方に事前に職員と約束をする事で「行ってくる」と、報告して散歩が済むと自ら帰ってこられる事例を紹介し、拘束を行わないことを前提としたケアを発信している。職員は外部研修や集団指導により拘束への認識を新たにし、共通認識を持って入居者の支援にあたっている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	勉強会や研修で利用者の権利擁護について学ぶ機会を設けている。そのため、カギをかけない介護、ドラッグロック、スピーチロックなどをしていない介護を基本としている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	外部研修にて学んでもらうよう努めているが、成年後見人制度に関しての研修も少なく、受講できない職員も多い。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	見学の時や契約時に丁寧に説明している。疑義についても随時説明している。解約・改定等についても、十分に説明し、契約を締結している		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者や家族が気軽に意見や要望を言っていただけるよう普段からコミュニケーションをとっている。申し出があった場合や家族からの喜びの声があった場合にはすぐに全職員に伝達し、反映させている。	職員は入居者の要望を普段から聞き取っており、食べたい物や行きたい所、したいことなど選択肢を投げかけながら確認している。毎月個別に家族へ向けた便りを送付して、入居者の近況を伝え、安心してもらうとともに、面会時には遠慮なく意見や要望がないかなど尋ねることとしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	勉強会や申し送り時にスタッフの意見や提案を聞く機会を設けている。日頃から意見の言いやすい雰囲気を作り、反映するようにしている。	職員は普段から気づいた点や要望を朝の申し送りで発言し、月の会議で必要な内容を検討している。年間研修計画に沿って月ごとに接遇や身体拘束、介護技術や防災などについて共有の場をもち、介護技術の向上や入居者の支援に反映させている。夜勤明けの職員への労いの声掛けや、必要に応じて上司が個人面談に応じ、働きやすい職場環境を目指している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は長年の介護現場の経験を活かし、各自が向上心を持って働けるような職場づくりに努めており、給与水準や福利厚生の上には特に努力している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修についてはできるだけ平等に受講の機会を設け、研鑽に努めている。また社内研修を行い外部研修に参加できない職員のフォローアップも行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域ケア会議、研修会での交流に留まることが多い。しかしながら、近隣の地域密着型サービス事業所2か所とは互いに相談を行うような間柄である。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	介護経験や人生経験の長いスタッフが多く、傾聴や気づきに長けており、利用者は入所後早い段階で安心した生活が開始できている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族ともよく会話できており、利用に至るまでの思い、現在の思い、今後の要望から日常の世間話まで傾聴しながら関係づくりに努めている。そのため、家族との世間話は積極的に行っている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入所時の状態にもよるが、在宅が可能ようであれば小規模多機能ホームの利用を提案し、本人の負担を軽減するように努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者それぞれの残存能力を見極めながら、暮らしを共にするもの同士として家事の協力だけでなく、利用者相互の助け合いも行ってもらっている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人と家族の絆を大切にするため、家族の支援も大切である旨を説明し、共に支えていく関係構築につとめている。そのために訪問時や電話により詳細を伝え、常に家族の一員であるという意識をもていただくよう努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	近隣にあるなじみの場所には出かけているが、遠方には難しい状況である。なじみの人が訪ねてきた際に、利用者が混乱しているときには職員が来訪者を含めフォローしている。	入居前からのこだわりであった暮らしを引き続き支援できるように、生活歴や家族の意見を参考にしている。好みの帽子を被っての生活や、毎日の化粧を日課としている方など、これまでの歴史を尊び、強制ではないものの正月の初詣や季節ごとの行事食、郷土料理を通じて、懐かしい食事を提供している。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者の皆さまが参加する体操・レクレーションを毎日行い、またカラオケなどにも参加していただき、両ユニットの方々が関わる機会を設けている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	長期の入院により退所された方から、ご相談があり、その際すぐに入所できなかったが、別の施設の利用を提案し、しばらくし、入所して頂いたケースもある。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	意思の疎通がとれる方とは毎日の会話の中から希望や意向を聞き出している。コミュニケーションが困難な方については表情や行動から思いを推し量り、把握に努めている。	職員は日中のリビングや散歩中、1対1になる入浴支援の際に入居者とゆっくり関わり、会話の中から、ホームで何をしたいのか、してもらいたいのかを聞き取っている。中には表現困難になられた方もおられるが、これまでの入居者の暮らし方やこだわりなどを重視し、言葉を投げかけた時の表情を見ながら本人本位になるよう努力している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	家族からの聞き取りや、情報提供書、認定調査時の情報の閲覧など、生活歴・既往歴などの把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	有する能力を把握し、個別の機能訓練や一人ひとりにできる活動や作業に取り組んでいただけるよう過ごしていただいている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人、家族とは普段から意向を聞いている。また、家族を交えたカンファレンスを行い、現状の報告、説明を行いそれらに関する意見を頂き、介護計画に反映させている。	入居者の体力や運動機能低下、食事形態の変更等、変化する状態に応じたプラン内容としている。定期的な評価により継続の有無や更に内容の変更をおこない、現状に沿った支援ができる様検討している。計画作成担当者は職員の気づきや意見を尊重し、入居者・家族の意向を最優先にしながらプランを立案している。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
		日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	業務日誌、個人ケース記録、カンファレンス、申し送り帳、1日2回の申し送りにて情報を共有し、介護計画の見直しや実践に生かしている。		
28		〇一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	現在、既存のサービスの提供にとどまっているが、姿勢調整を行う治療院を併設したので姿勢調整のサービスを提供していきたいと考えている。		
29		〇地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	運営推進会議などを通じて地域の方々からの情報もあり、地域資源についても把握している。「ささえり飽田」からの助言を受けながら、安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう努めている。		
30	(11)	〇かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	特に希望がない場合には協力病院を受診しているが、希望される医療機関があれば意向の通りとしている。その際の受診については家族対応をお願いしているが、困難な場合には職員対応としている。訪問診療があることも伝えている。	かかりつけ医は本人・家族の意向に応じており、協力医や希望する医療機関での受診や往診が行われている。受診は可能な限り家族に対応を依頼しているが、現在、ホームでも柔軟に応じている。本人の受診外出や家族の対応が困難になった場合は、往診に変更されている。口腔ケアについては、希望や必要に応じて訪問歯科を支援しており、職員は基本的に毎食後の歯磨きを自立や介助で支援し、歯ブラシに加え、舌ブラシも使用している。	
31		〇看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	個々の利用者についての相談をはじめ受診や看護等について看護師が2名おり、また併設している小規模多機能ホームにも看護師が在籍しているので介護職員は心強く業務ができています。		
32		〇入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	救急搬送時、主治医の指示に従い搬送先の医師や看護師の求めに応じ十分に時間をとって情報提供を行っている。かかりつけ医や訪問診療医、看護師とは日頃より良い関係づくりに努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入所契約時にも終末期についての意向確認を行い、その時点での意向確認書や同意書を頂いている。家族を交えたカンファレンス時に看取りについての説明を行い、不安を感情についても支援できるよう努めている。	入居時に重度化・終末期に関するホームの取組を伝え、その時点での意向を書面に残し、その後も家族の思いを聞く機会を持っている。家族には看取り介護やターミナルケアとの違い、ご家族にお願いしたい事などの項目をわかりやすく、カット絵を添えた冊子「最期のときを迎えるまえに」を配布している。看取り支援に関する研修会については、ホームや、外部研修に参加し共有を図っている。今後はAEDの使用方法についても、全職員が使用できるようにしていきたいとしている。この一年間で、100歳を越された方の看取りが行われている。看取り支援については、職員へのメンタル面にも十分配慮して行われている。	看取りを支援した方の通夜に参列した際、住職より「最期の様子を家族にも話して欲しい」と、依頼されたことで、職員は新ためて人の最終を支援する介護の現場の役割を感じている。今後も日頃の関わりを大切に、ホームに出来る最良の支援に努めていかれる事を期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時の連絡網であったり手順について勉強会にて確認している。今後はAEDの使用方法についても全職員が使用できるよう努めていきたいと考えている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	火災を想定した避難訓練は年2回行っている。ハザードマップ等を利用し現状における最適な方法を策定している。地域との協力体制については、運営推進会議にて相談し、助言を頂いている。	今年度は8月に運営推進会議のメンバーに避難の様子を見てもらった訓練と、3月に団上りの畳の上に避難を行う訓練を実施している。自然災害時の避難では、ホーム内での避難の方が安心と考え、検討を行っている。ホーム内は整頓を心掛け、避難誘導がスムーズに行えるよう十分配慮している。	今後は訓練の際、家族へも参加・協力を呼びかけ、感想を受ける事も良いと思われる。また、ホームが確保している備蓄については、リストをもとに運営推進会議や家族へも報告を行うことで安心に繋がることや、今後に繋がる意見も出されるものと思われる。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	言葉づかいに関しては特に厳しく指導しており、スタッフには一人ひとりの人格や誇りを尊重した対応を心がけるよう求めている。プライバシーについてもきちんと保たれたケアができています。	一人ひとりのこれまでも尊重した対応に努め、特に言葉使いについては、代表者や管理者より指導が行われている。身だしなみやおしゃれについても、家族の来訪時、本人のみではなく、どの方を見ても安心されるような支援を心掛けている。トイレや入浴支援時に希望があれば同姓で対応している。呼称は苗字やこれまでの呼ばれ方、反応などを考慮し、家族にも相談しながら対応している。	入居者への対応については、言葉使いをはじめ指導が行われているが、今後も「今の声かけで安心されているか」など、入居者の表情からくみ取りながら支援に努めていかれる事を期待したい。

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常的に職員主導にならないよう心掛けており、本人の希望や快不快の感情を大切にしている。日頃より本人による自己決定を行っていただいている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員側の業務優先になりがちであるため、日頃より待つこと、またその方のペースを大切にしよう気を付けおり、本人の希望に沿った支援を行っている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	きちんとした身だしなみは支援の基本であると考えている。面会があった際、自分の縁者以外の利用者もきちんとしていることでご家族も安心されると思い身だしなみには常に配慮している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	食事の準備や後片付けはできる方できない方がいらっしゃるが、できる方には調理の下準備や食器拭き等を多くのなるべく方々をお願いしている。ホットプレートを使い一緒に調理もしている。	専任者を中心に調理や献立作成が行われている。季節感や入居者の好みを取り入れ、器や盛り付けなど、美味しく楽しい食事支援の提供は、開設時からホームのこだわりであり、本人や家族にも好評である。家族も敬老会などホームの食事を摂る機会を持っており、感想などを受け今後活かしている。入居者は直接日々の調理に関わる機会はないが、ホットプレートを使った料理やおやつ作り、食器拭きなど出来る事で食に関わってもらっている。	今後は食事の形態やメニューを含め、食事支援について全職員で話し合う機会を持ちたいとしている。食事は入居者の楽しみの一つであり、職員の意見やアイデアにより、変わらぬホームの特徴となる食事支援を継続していきたい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事については献立が豊富だと自負している。ベテランスタッフの栄養と見た目を考えたメニューは利用者、ご家族からも大変喜ばれている。食事が減っている方には栄養補助ドリンクにてカロリー確保を行っている。水分については摂取量を記録し状態の確認をしている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	協力医院から訪問歯科診療に来ていただき、利用者だけでなくスタッフも歯科医師や歯科衛生士より説明や指導を受けている。口腔ケアは毎食後行っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	声掛けや誘導を行うことにより排泄の失敗やおむつの使用量を減らす努力をしている。毎日の申し送りにておむつの使用量を減らすための方法を考え、実践し、再び改善することを行っている。	個々に応じた声掛けや誘導を行い、失敗のない排泄により自尊心を保ち、不快なく過ごせるように支援している。殆どの方が紙パンツで過ごされているが、布パンツや身体状況から昼夜を通しテープ式オムツを使用されている方もおられる。夜間のみ使用される方のポータブルトイレは、洗浄後日中はバケツを日光に干し、清潔に管理している。排泄用品はホームでも準備しているが、面会を兼ねて持参される家族もあり、サイズをはじめ適切な品を伝えている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分をきちんと摂っていただき、また朝は牛乳を飲んでいただき、下剤を使わなくて済むよう努めている。下剤の量や頻度についても本人の排便の状況により調整している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	現状、時間や曜日を決めて週3回の入浴を行っている。ただし、本人の希望があればいつでも入浴を行っている。	各ユニットに浴槽は2か所設けられ、入居者の使い慣れた方で基本的に週3回、午後からの入浴を支援している。また、失禁時や希望があればその都度対応している。脱衣所や浴室は用途別に掃除用の布やタオルを使い分け、清潔に管理しており、入居者に気持ちの良い入浴支援が行われている。菖蒲や柚子湯も継続して取組み、二日間実施し全員が入れるようにしている。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	本人の希望に沿って休んでいただいている。時刻により就寝や起床の声掛けは行うが本人の意向に任せている。ただし、食後1時間以上は誤嚥の心配があるため、座位姿勢をとって頂いている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	内外用薬ともに作用副作用についての理解に努めている。処方された薬の内容や量について疑問があるときは利用者の一番近くにいる立場のものとして、主治医に相談するなど服薬支援に努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	活気のある生活を送っていただくため、その方々の生活歴や性格を鑑みて、裁縫や業務用品作成などの細かい仕事等をお願いしている。また、いろいろな玩具等も提供し本人の状態を確認しながら変更が楽しんでいただいている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	ご本人の要望を大切にしている。近隣へのちょっとした外出(買い物やドライブ)は頻度を高くできるよう心掛けている。外出行事に関しても同じ内容ではなく利用者の状態にあった内容で行っている。1対1での外出も行っている。	敷地内や近隣の散歩をはじめ、買い物など個々の体調や要望を大切に外出を支援している。初詣や「ながなすコンサート」、新港へのドライブなど、地域の行事や資源を活用した外出も情報を収集しながら継続して取り組んでいる。外出が困難になった方もあり、壁面(5月は矢幡を使ったタペストリー)やその時々で季節の花の写真を掲示することで、外出気分を味わってもらえるようにしている。	受診や外食など家族の協力が得られており、今後も面会時の散歩やイベントなど入居者が戸外に出る機会を、家族と一緒に支援されることを期待したい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	外出行事の際の買い物、神社参拝、近隣店舗(100円ショップ等)への買い物の際本人に支払っていただく。受診時に飲み物を買うこともしている。利用者の方の大半の方は所持金の管理が難しく施設側で管理している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご本人からの要望があればすぐに対応している。日中はご家族も仕事をしているため繋がらないことが多い。ご家族にも利用者へ短時間でもよいので電話していただけるよう働きかけている。電話の頻度を増やしていただいたご家族もある。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	両ユニットとも利用者の状況によりモノが置けなくなってきた状況がある。季節感のあるものを置きたいがそれが難しい状況がため、壁面飾りをその月にあったものを飾っている。	明るく開放的な食堂を兼ねたリビングホールには、入居者の外出やイベント時の写真が掲示されている。また、職員の工夫により歌詞とそれに合う切り絵や折り紙を貼り、楽しみな空間となっている。ホーム内に飾る花は、職員や家族が庭先に咲いた季節の草花を持ち寄ることで、やさしい華やかさを提供できると語っている。入居者の状況に合わせてソファを配置しており、日光浴をしながらお気に入りの場所で寛がれる入居者の姿が見られた。職員は掃除や換気に努め、この冬は特に感染症対策を兼ね、加湿・空気清浄機の台数を増やしている。	入居者の写真の掲示は来訪時の家族にとっても楽しみと思われる。今後も毎月の写真の掲示を継続していきたいとしており、取組が期待される。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用空間は広く、またソファを増やしくつろげるスペースを多くした。また簡易ベッドを置くこともある。皆思い思いの場所で過ごし過密な状態ではない。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人や家族で居室作りされているところもあるが、認知症の周辺症状によりシンプルな居室もある。居室のレイアウトを本人で変えている場合は危険がない限り自由にしている。あまりにモノが散乱しているときは職員が現状に沿った整理をしている。	ベッドや段上がりの畳スペースに、布団敷きができる居室が設けられていることは、ホームの特徴である。テーブルや3段ボックスをホームで準備し、自宅からタンスやハンガーラックをはじめ衣類や帽子、アルバム、小物などの持ち込みに囲まれた部屋もあるが、本人の状況によっては、スッキリとした部屋が作られている。必要に応じて職員が整頓を行っているが、自身でレイアウトをされる方もあり、見守りを行いながら自由な環境作りを支援している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	歩行器、車いすを使用した場合でも移動しやすい構造になっている。トイレ内の手すりや呼び出しボタンもあり、できるところまで本人にお任せしている。難しい部分に関しては出来るようになるような支援を心がけている。		